

館報 教育記念館



**お笑い道場
けいこ風景**

**特別展
「富山県小学校教育
140年の歩み」展
(後編)**



主な内容

- ◎教育時評 富山県小学校長会 会長 長井 忍 2
- ◎第23回 郷土の先賢顕彰者 ●佐々木大樹 ●中田清兵衛 3
- 杉谷 文之 ●継続顕彰者
- ◎特別展「富山県小学校教育140年の歩み」(後編) -昭和期(戦後)から平成期まで- 6
- ◎恒例展 「第4回児童・生徒によるものづくり」展
- ◎恒例展 「第11回さんすうワールド」展 7
- ◎「きらめき未来塾」 思考道場 お笑い道場 右脳活用道場
- ◎元気な地域づくり、元気で創造性豊かな人材の育成及び支援事業
・平成25年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業
- ◎恒例展「第10回子どもの目 自然不思議発見写真展」 8



発行所／公益財団法人 富山県ひとつくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
 TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
 (教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076) 433-2770)
 発行人／富山県教育記念館 館長 伏黒 昇 印刷所／いおざき印刷株式会社



水草に学ぶ

富山県小学校長会

会長 長井 忍

校内で子どもたちと「海の森」ならぬ「川の森づくり」を始めた。バイカモなど清流で可憐な花を咲かせる水草や市販の水草はともかく、身近な用・排水路やため池などで生育する在来水草に目を止めることは、ほとんどないだろう。そんな水草も水槽に入れれば、思いも掛けない美しい緑に包まれた水の世界をつくり出してくれる。水草の葉についた無数の気泡が光を浴びて輝く様は、実に神秘的である。朝日を浴びた水槽は、プリズムとなって虹を映し出す。水を通る光、水に溶け込む酸素や二酸化酸素、栄養素、様々なものを命につなげ呼吸しながら伸びていく茎や葉。水槽内の環境バランスが保たれてくると、水の透明感は凜とした感じに変化していく。小さな水槽の中で、呼吸や光合成、発芽・生長、目に見えない小宇宙の営みが限りなく繰り返されていると思うと不思議な感じがする。

そんな水槽内の水草の動きを眺めながら、ふと気づいたことがある。水草には水底に根を固着させるものと浮遊するものがある。水底に根を張る水草の茎や葉は、水の流れに逆らうことなくしなやかな動きを見せる。一方、浮遊タイプは、確かに流れに逆らうことなく動いてはいるが、茎や葉はほとんどその形を変えることはない。「しなやかであるためには、揺らぐことのない根が必要なんだ！」生き方にも、教育にも通じる当たり前のことを、あらためて気付かされた思いがした。

近年、少子化や国際化、人間関係の希薄化が進む中「異質なものを認める寛容さ」「多様な人との接し方」など、周囲との望ましい人間関係をどう結ぶか、ますます難しい課題になっている。このことに関連してよく耳にする言葉が「しなやかさ」なのである。

「学ぶとは変わること。自分が変わらないうえ、相手だけを変えようとしてもぶつかっただけ」とは言うものの、相手に併せて次々に自分を変えていくと、そのうちに自分が何者であるか、立ち位置さえも分からなくなってしまう。時代の流れの中でも、揺らぐことのない根がしっかりと張られているからこそ、浮遊と異なるしなやかな対応が可能になるのだと思う。しなやかさは、自分の思いと異なる状況の中で求められる生きる力でもある。特に、人と人が関わり合う教育は、互いに思い通りにならないことの連続である。医学や科学技術などのように先人の経験をそのまま生かし積み上げていくことはできない。だから、我々は、先人が悩み考え身につけてきたしなやかさを、先人と同じように行きつ戻りつしながら一から学び身につけていかなければならない。山積する教育課題を前に、単に先人の足跡をなぞるのではなく、先人が大切にしたい心を見つめることで、しなやかな対応を生む根を見出したいものである。

奉職以来「富山の教育」「教育県富山」という言葉を当たり前のように見聞きしてきた。今あらためて富山の教育とは何か、教育県という看板はいかにして得られたのか、思いを巡らせた。私が憧れた多くの先輩方は、常に教材研究や授業研究、評価研究と正対し、その姿は、一人一人を見つめ育てる「熱い思い」「冷静な分析」「切磋琢磨の気概」に支えられていたように思う。

煩雑な日常の中であって、教育記念館には、そんな富山の教師が大切にしていた心と呼び覚ましてくれる凜とした空気が感じられる。

第23回 郷土先賢室顕彰者紹介



黒部の自然が生んだ偉大な芸術家（彫刻家）

さ さ き たいじゅ
佐々木 大樹 (1898~1964)

彫刻家。明治22年（1889）、父次郎四郎、母そわの三男として、下新川郡愛本村大字音沢村（現在の黒部市宇奈月町音沢）に生まれ、7人兄妹の大家族の中で育った。本名は長次郎という。父は、農業のかたわら酒の販売や、宇奈月温泉の源泉地である黒薙温泉を経営するなど、経済的には恵まれた家庭であった。幼いころから、絵を描いたり、彫り物をしたりすることが好きで、黒部川に流れ着くいろいろな流木を集めていた。この木との出会いが、後の木彫へとつながっていった。

明治37年（1904）、富山県立工芸学校（現在の高岡工芸高等学校）の木工科彫刻部本科に入学し、本格的に木彫を学んだ。その後、東京美術学校彫刻科本科木彫部へ進み、竹内久一、高村光雲といった日本の彫刻界を代表する芸術家のもとで近代彫刻の精神と在り方を学び、ひたむきに制作に取り組んだ。在学中、いかに自分自身の独自の彫刻を生み出すかについて悩んだが、鎌倉時代の仏像に出会い、その力強さと美しさに深く心を打たれ、自分の進むべき方向を確信した。卒業後は、伝統的な仏像彫刻の精神に現代性をあわせもった独自の彫刻を制作した。

大正9年（1920）、第2回帝展に「誕生の頃」を初出品し、特選を受けた。第8回帝展出品作「紫津久」は帝国美術院賞を受賞するなど、日本の彫刻界に確かなポジションを築いた。その後、彫刻の制作を続けながら、昭和9年（1934）、帝国美術学校（現在の武蔵野美術大学）の教授となり、翌年、多摩帝国美術学校（現在の多摩美術大学）創立とともに教授となり、後進の指導、育成にあたった。穏やかな人柄で、多くの学生から慕われた。展覧会では輝かしい実績を残し、そして大学の教授となったにも関わらず、「名声、地位は作家には不要。いかに自分の納得したものを作るか、それだけが作家の生命だ。」と語り、制作に打ち込んだ。

昭和50年（1975）から「ふるさとの地に、生涯をかけた作品を残し、郷土の繁栄と未来の安泰を祈りたい。」という願いのもと、「平和の像」の制作を始めたが、そのさ中の昭和53年、帰らぬ人となった。「平和の像」の制作は、彫刻家である五男日出雄に引き継がれ、12.7mの像が昭和57年（1982）10月に完成した。その「平和の像」は、現在も大原山山頂から、温かく深い愛情に満ちたまなざしで、悠久の黒部川の流れと人々の姿を見つめている。

平成26年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



女子医学教育の発展に尽力した医学博士

佐藤 やい (1898~1964)

佐藤やい、旧姓安川やいは、明治31年（1898）、川舟業を営む弥次郎とすての次女として射水郡新湊町放生津（現射水市）に生まれた。15歳で近くの石黒医院で働き始めたことが、きっかけとなり医学の道を志した。17歳のとき、東京女子医学専門学校校長の吉岡彌生の書生となった。学校の事務職員として働きながら勉強し、文部専門学校入学資格検定に合格し、東京女子医学専門学校に入学した。

卒業後、吉岡の薦めもあり病理学の研究者となり、29歳で助教授に昇任した。昭和7年（1932）からドイツへ2年間留学し、リウマチの研究を深める。昭和12年（1937）に東京帝国大学医学部に学位論文『冷却ロイマチナス―実験的補遺』他を提出し、全国で14人目、富山県では初の女性の医学博士となった。3年後教授に昇進し、血液学の研究に邁進。早くから吉岡から後継者と期待され、昭和27年（1952）、母校の大学の昇格の際にも吉岡の右腕として尽力する。

40歳で、四男三女のある佐藤清一と結婚。昭和31年（1956）、緑内障をきっかけに研究の第一線から離れ、厚生を中心に医学生を支え続けた。また、国内外の女医会の役員を務めるなど、女子医学教育発展の礎を築いた。享年66歳。



うまい米づくりにかけた人

すぎたに ふみゆき
杉谷 文之 (1907~1985)

明治40年(1907)12月1日、中新川郡柿沢村新屋(現上市町新屋)に父文作、母つうの長男として生まれた。柿沢小学校卒業後、県立上市農学校、三重高等農林学校、京都帝国大学農業科へと進み、昭和7年(1932)、24歳で農林省に入省した。昭和10年(1935)には、山形県の農事試験場尾花沢試験地で初代主任として水稲の品種改良に携わり、寒冷地でも多収穫が期待される「尾花沢1号」を開発、農業技術者としてその名を馳せた。「冷害から農村を救う米を作りたい」この言葉に文之の信念を感じることができる。

昭和23年(1948)3月に新潟県農事試験場に迎えられた。すぐさま新潟県内の農村を見て歩いたところ、土の層が薄く土地が悪く、疲弊した農村が多い状態を目の当たりにし、特に魚沼のような山間の冷たい湧き水や養分の少ない土地でも生育できる水稲を開発しなければならないと痛感した。

昭和27年(1952)に新潟県農業試験場長に就任した。翌年に「越南17号」の種籾が福井県から送られてきた。この「越南17号」は熟色がよく味もよいが、草丈が長くて倒れやすく、いもち病に弱いという大きな欠点があり、「芸者稲」と揶揄されていた。しかし、「量より質の時代がきつと来る」と確信した文之は、福井、石川、富山の各県が栽培をあきらめていたこの品種の可能性にけることを決意し、まず新潟県の奨励品種とすることを旨として、3年間にわたって試験栽培を行った。昭和30年(1955)に「越南17号」は新潟県の奨励品種になった。開発した福井県が農林省に申請し、水稲品種「農林100号」として登録され、新潟県が品種名を“越の国で光り輝く稲”という意味で「コシヒカリ」と命名した。

奨励品種になったものの、まだ多収穫品種が好まれたこの頃、コシヒカリは、農家から「稲が倒れやすい」「いもち病になりやすい」「収量が少ない」との悪評が高まり、栽培面積は伸び悩んだ。その中で文之は「栽培方法でカバーできる欠陥は致命的な欠陥にあらず」としてコシヒカリの栽培技術の向上に取り組んだ。文之は技師とともに肥料の与えかたを抑えたり、水管理を工夫したりすることで、草丈を抑え、いもち病にかかりにくくするといったコシヒカリの栽培方法を確立していった。

その矢先の昭和37年(1962)、志半ばで農事部参事に異動となり、同年、新潟県職員を依願退職して、上市町に帰郷した。55歳であった。帰郷後は、一農民としてコシヒカリの種籾を栽培し、まわりの農家からの相談も気さくに受け、栽培方法も伝えた。昭和41年(1966)には並河農業技術賞を受賞した。

コシヒカリは、昭和44年の自主流通米制度発足により、うまい米としてにわかに脚光を浴び、昭和47年に富山、石川、福井の各県で奨励品種に指定され、昭和54年(1979)には全国の作付面積で1位になった。

昭和56年(1981)新潟米生産50周年で功労者表彰を受けて間もなく、昭和60年(1985)77歳の生涯を閉じた。正五位勲四等瑞宝章が追贈された。

平成26年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



万葉の心で暮らしを歌い続けた農政者

いがらし あつよし
五十嵐 篤好 (1793~1861)

ますらをはかくぞ世の常君のため 世のためと思ふ心やまめや

篤好66才のとき加賀藩から処罰を受け、謹慎させられた際に詠んだ歌である。当時の和歌は「古今集」の流れを汲むものが多かったが、篤好は「万葉集」の作風を生かした「万葉調」の力作を数多く残している。篤好の残した歌からは終始農民として生き、十村役、村民の代表として自覚を持ち続けたことが伝わってくる。

五十嵐篤好は、砺波郡内島村(高岡市)の十村役、五十嵐之義の長男として生まれ、屈指の数学者石黒信由につき、その専門知識を生かして舟倉用水(大沢野)開削などに功績を残した。「高免考」以下数冊の農政書を著述した。

加賀藩政策上の処置で1819年(文政2)能登島に流刑されたが、やがて十村役に返り咲き砺波郡総年寄役にも任命された。流刑の際に国学に目覚め、富士谷御・中村孝道に国学・言霊学を学び独学で書道史を研究、「言霊旅眺」「本朝墨談」など多くの国学・歌学の著述をした。

享年68才。「ふすしのや詠草」全12巻5700余首の和歌を残し、万葉の心で暮らしを歌い続けた歌人・国学者であった。



富山商人の真骨頂を示した実業家

十五代 ^{なかだ}中田 ^{せいべえ}清兵衛 (1876~1970)

実業家。富山町（現 富山市）常磐町の薬業家九代密田林蔵の五男として明治9年（1876）に生まれ、幼名を徳治郎といった。県立富山中学校から金沢医科専門学校薬業科（現 金沢大学薬学部）へ進学し、卒業後、軍隊に入隊した。明治30年（1897）、21歳の若さで富山貯蓄銀行取締役役に就任した。以後、50年間にわたり銀行業と関わった。

明治33年（1900）4月、14代 中田清兵衛の養子となり、養父の経営する家業（薬業・書店）や銀行の業務を助けた。大正5年（1916）11月、養父が亡くなり、15代 中田清兵衛を襲名するとともに、家業（薬業と書店）だけではなく、養父が頭取を務めていた富山第十二国立銀行の頭取も推されて引き継いだ。

清兵衛は頭取として、堅実な経営を第一とし、地元の売薬業者などとの関係を大切することにより預金を増やし、ときには有効に貸出をして信用を深めていった。大正12年（1923）の関東大震災を起因とする不景気により、清兵衛の実家が経営していた密田銀行が倒産した。このとき、清兵衛は密田銀行から特別融資を頼まれたが断っていた。「私は多くの方々から信頼されて十二銀行をお預かりしております。もしお金を融通して、万が一にもお客様に迷惑をかけることがあっては、それこそ大変です。だから私は援助しなかったのです」と、身内だからといって特別な扱いをしなかった。また、昭和4年（1929）にアメリカ合衆国から始まった世界恐慌のとき、十二銀行は各方面から貸出を依頼されて窮地に立ったが、「貸出の厳正を期す」との清兵衛の方針のもと、かえって預金が増加したという。

昭和18年（1943）、戦時下の統制経済によって銀行の合併が進められていく中、清兵衛が中心となり、十二銀行、高岡銀行、中越銀行、富山銀行の四銀行が合併し、新しく北陸銀行が誕生した。清兵衛は推されて初代頭取に就任し、昭和21年（1946）、病気のため辞任するまで、十二銀行以来、30年余りにわたって頭取を務めた。

清兵衛の生活はきわめて質素で「勤儉貯蓄」を信条としたという。しかし、世のため、人のためになる社会事業や慈善事業には寄付を惜しまなかった。また、清兵衛は銀行のほか、家業の薬業・書店をはじめとして日本海運電気株式会社、明治図書株式会社などの重役を歴任し、富山県薬剤師会顧問、富山県商工会議所顧問などの役職にも就き、社会や公共のために尽力した。県内のみならず、北陸地方の教育、金融、産業界に多大な貢献をし、昭和30年（1955）に藍綬褒章、昭和40年（1965）に勲四等瑞宝章を受章した。同年、民芸館を建設し、富山市へ寄贈する。昭和41年（1966）、富山市は清兵衛を「富山名誉市民」として推戴し、永年の労に報いた。昭和45年（1970）、清兵衛は東京の別邸にて逝去した。享年は、93歳であった。

平成26年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



越中の自由主義思想の先駆者

^{うみうち} ^{はたす}海内 果 (1850~1881)

海内果は、射水郡中老田村（現富山市）に久五郎の五男として生まれ、岡田呉陽に漢学を学んだ。明治4年（1871）、21歳で村肝煎となり村政を担当した。明治9年、射水郡第14大区副区長となって、現在の小杉地区の行政に携わった。青莪小学校（現在の老田小学校）を築いた。明治6年（1873）、小杉の増田伝七が、中央の様々な啓蒙の書籍を取り寄せて販売する開智社という書店を開いたが、この書店が中央の文明開化に目を開くきっかけとなった。明治8年（1875）、「東京日日新聞」に「社会に対する所見」を寄稿し、何度も掲載された。

明治9年（1876）12月、主筆に請われて東京日日新聞に入社し、伊藤博文らとも交流し、すぐれた社説を論述した。漸進的な民権論を中央の論壇で展開し、士族中心の急進的民権論に対抗して、まず個人から町村、府県へと、下から順次自治を拡大していくことを主張した。

明治10年（1877）9月、小杉に「相益社」を結成。明六社の「明六雑誌」のように学術総合機関誌「相益社談」を発行し、勸業、教育、文芸などについて論じた。また、近代私学の先駆け慶応義塾に対しては、「越中義塾」を創設する準備をし、郷土の有志を啓発するなど、言論界の育成を進めた。明治14年腸チフスに倒れ、急死した。享年31歳。

後の自由党の稲垣示ら、郷土の指導者・思想家が輩出する基礎を築いた先駆者であった。

特別展

「富山県小学校教育140年の歩み」展(後編)

4月25日(木)～6月2日(日)



紀要(出版)



展示会場



寄贈された創校記念誌(257冊)

前年度に続き、富山県の初等教育(小学校教育)が、昭和(戦後)期から平成期まで、敗戦と復興、その後の社会経済の発展とグローバル化の中でどのように変遷してきたのか、教育資料部会で調べ、まとめたものを展示しました。

教育資料部会 顧問：須山盛影 部会長：布村 徹 副部会長：豊田善樹 山本弘子
 委員：相川 仁 石田和義 吉田優子 吉藤寿美栄 滝口教子 藤田博美 山口ひろみ
 荒屋 誠 高田公美 吉尾真智子 藤城純子 竹島慎二

恒例展

第4回「児童・生徒によるものづくり展」

6月13日(木)～7月14日(日)



県内には、伝統的、創作的な作品の製作に取り組んでいる小・中・高等学校が多くみられます。教育記念館では、その発表の場として「児童生徒によるものづくり展」を開催しています。

今年も180点の作品が寄せられました。来場者はじっくりと作品を鑑賞し、作品の多彩さに驚いたり、技術の高さに感心したりしていました。

恒例展

さんすうワールド展 -クイズ&パズル-

7月25日(水)~8月26日(日)



夏休み期間中に算数の面白さを味わってもらおうとクイズや立体パズルを展示しました。

訪れた人たちは、考える楽しさを味わっていました。

きらめき未来塾 (夏休み期間中)

お笑い道場 講師 三遊亭 円窓 (落語家)

右脳活用道場 講師 ねじめ 正一 (詩人・作家)

思考道場

講師 秋山 仁
(東京理科大学 理数教育研究センター長)

県内講師 山本弘章、山越励子、須古 充、
中野昌生、舟木麻衣



思考道場スペシャル公開授業

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業

平成25年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業 (助成対象校 1校に10万円助成)



平成24年度 沢スギ守り隊(上青小学校)

助成校

入善町立ひばり野小学校
魚津市立松倉小学校
富山市立宮野小学校
氷見市立速川小学校
南砺市立福野小学校

「子どもの目・自然不思議発見写真展」

9月5日(木)～10月6日(日)

自然への興味や関心の芽が育つことを願い、子供たちが自然界の不思議を撮影した写真の展覧会を実施しました。今年は117点の応募がありました。



会場風景



キャップがおうちのやどかりさん(1年)



カナヘビ三兄弟(5年)



犬がすわっている空(4年)



人をこわがらないカモメ(3年)



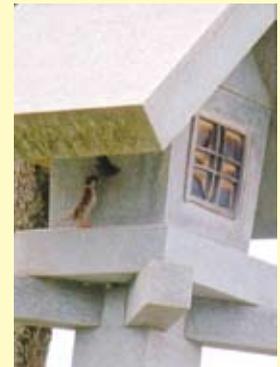
アゲハチョウのよう虫(2年)



きゅうり!!(4年)



天使のつばさ(5年)



秘密のお家(6年)

これからの展示予定

- | | |
|-------------------------|---------------------|
| ・ 特別支援学校 みんながんばってます作品展 | 10月31日(木)～11月17日(日) |
| ・ 富山県造形教育作品展 | 11月24日(日)～12月8日(日) |
| ・ 「アイデアロボットフェスタ」ロボット展 | 12月13日(金)～1月19日(日) |
| ・ 第24回 富山県中学校美術展 | 1月30日(木)～2月16日(日) |
| ・ 第7回 富山県版造形教育作品展・秀作回顧展 | 2月27日(木)～4月6日(日) |

あ・と・が・き

先日、富山市立堀川小学校の3年生が記念館を訪れました。あいにくの雨で暗い日でしたが、子どもたちの元気な声で、館内が一気に明るくなりました。次の日曜日にはその成果か、親子で館内を見学する姿が見受けられました。

